



『源氏物語』における手習歌的な和歌：
藤壺宮の歌「袖ぬるる」の袖の所在をめぐって

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪公立大学 現代システム科学研究科 現代システム 科学専攻 言語文化学分野 公開日: 2024-04-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 美来 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/0002000674

『源氏物語』における手習歌的な和歌

—藤壺宮の歌「袖ぬるる」の袖の所在をめぐって—

小西 美 来

はじめに

紅葉賀巻において、藤壺宮は若宮を出産する。光源氏は、若宮に会えないことを嘆き、子ゆえの闇に惑うこととなる。やがて、藤壺宮と若宮は御所へ参内する。若宮を見た桐壺帝は「瑕なき玉」（紅葉賀①三二八頁）のようであると讃え、参内していた光源氏に若宮を見せる。若宮との対面が叶った光源氏であったが、桐壺帝の「光源氏と若宮が」いとよくこそおぼえたれ。いと小さきほどは、みなかくのみあるわざにやあらむ」（紅葉賀①三二九頁）という発言に恐懼するとともに、「ゆゆしうつつくしき」（紅葉賀①三二九頁）若宮を見たことで、愛着が募り心が乱れることとなる。

その後、光源氏は二条院へと退出したものの、心の乱れは収まらず、庭に咲く撫子の花を手折って王命婦へ長い手紙と和歌を贈

る。その和歌は、王命婦の手を介して、藤壺宮の目に留まることとなり、藤壺宮の歌を導くこととなった。その歌の場面を引用すると次の通りである。

御前の前栽の何となく青みわたれる中に、常夏のはなやかに咲き出でたるを折らせたまひて、命婦の君のもとに書きたまふこと多かるべし。

「よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさるなでしこの花

花に咲かなんと思ひたまへしも、かひなき世にはべりければ」とあり。さりぬべき隙にやありけむ、御覧せさせて、「ただ塵ばかり、この花びらに」と聞こゆるを、わが御心にも、ものいとあはれに思し知らるるほどにて、

袖ぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまと
でしこ

とばかり、ほのかに書きさしたるやうなるを、喜びながら奉れる、例のことなれば、しるしあらかしとくづほれてなぐめ臥したまへるに、胸うちさわざいていみじくうれしきにも涙

落ちぬ。(紅葉賀①三三〇頁—三三二頁)

本稿では、藤壺宮の「袖ぬるる」歌について検討する。藤壺宮の和歌は、旧注時代から解釈が揺れて定まらない。近年では、一首が光源氏との贈答歌となっている点を重視し、光源氏の和歌と関連付けて論じられる傾向にある。

しかしながら、藤壺宮の和歌は、「ほのかに書きさしたるやう」な和歌であり、光源氏の和歌ではなく藤壺宮の内的煩悶が詠作契機となっている。贈答歌よりも、独詠歌の一種である手習歌に近い性質を有するように思われる。藤壺宮の和歌が詠まれた場に着目をし、藤壺宮の和歌が喚起する情景を考察したい。

一、藤壺宮の和歌の研究史

まず、藤壺宮の和歌がどのように解釈されてきたかを確認する。

藤壺宮の「袖ぬるる」については、旧注時代から二点の事柄で解釈が揺れている。すなわち、初句の「袖」を「藤壺宮の袖」とするのか、〈光源氏の袖〉とするのかという点と、四句目の「うとまれぬ」の「ぬ」を「完了」「ぬ」の終止形」として解釈するのか、

〈打消「ず」の連体形〉として解釈するのか、という点においてである。この二点について、旧注時代から現代にいたるまで、次の四つの解釈が示されている。

(1) 袖は〈藤壺宮の袖〉で、うとむは〈打消〉

(2) 袖は〈光源氏の袖〉で、うとむは〈完了〉

(3) 袖は〈光源氏の袖〉で、うとむは〈打消〉

(4) 袖は〈光源氏の袖〉で、うとむは〈打消と完了の掛詞〉

旧注・新注時代においては、(1)の解釈が優勢であった。『萬水一露』は、「此とこ夏の花は袖をぬらす露のゆかりと思ふになをうとみかたきとの心也」と解釈し、『玉の小櫛』も、「初句、御みづからの也、四の句、猶うとまれざる也」と理解し、萩原広道の『源氏物語評釈』も「わが御袖のぬる、涙の所縁と思へどもなほうとまれざるよと也」と解釈している。

唯一、旧注の『孟津抄』のみが「袖をぬらさる、露のゆかりは我によそへて若宮を御覧するとなればなを此若宮ほうとましきとの心也」と、(2)の解釈をしている。

その後、近現代に入ってから、旧注・新注時代の(1)と(2)の解釈の一部をあわせもつ説である(3)の解釈がなされるようになる。すなわち、袖は(2)の説と同様に〈光源氏の袖〉とするが、うとむについては(1)の説のように〈打消〉として解釈

するものである。

注釈書においては、日本古典全書・玉上琢弥氏『源氏物語評釈』・日本古典文学全集・中野幸一氏『正訳源氏物語』が(3)の説を採っており、たとえば、『正訳源氏物語』では次のように一首は訳されている。

あなたが袖をぬらされた愛情のゆかりと思うにつけても、やはりうとむ気にはなれません、この大和なでしこを。

この解釈の場合は、藤壺宮は、若宮のことを袖を濡らしている光源氏のゆかり、つまり、不義の子であると認めながらも、若宮を愛おしんでいることとなる。

一方、『孟津抄』のように、袖を光源氏の袖とし、うとむは(完了)と解釈する(2)の説を採る注釈書もあり、日本古典文学大系・新潮日本古典集成・新編日本古典文学全集・新日本古典文学大系がこの説を採る。たとえば、『新潮日本古典集成』は、一首を以下のように訳している。

あなたのお袖の濡れる露に縁のあるもの(悲しんでおられるあなたのお子)と思うにつけても、やはり大和撫子(このお子)をいとおしむ気にはなれません

この場合は、藤壺宮は光源氏との不義の子である若宮を愛していないこととなる。

以上のように、旧注・新注時代においては、藤壺宮の「袖ぬるる」の袖の所在について説が対立していたのに対し、近年の注釈書では、袖は光源氏の袖を指すという説が通説化し、その上で、「なほうとまれぬ」の「ぬ」の解釈をめぐって(2)と(3)で説が対立している。

「ぬ」をどのように解釈するかによって、若宮に対する藤壺宮の思いが正反対のものとなるわけであるが、この点について、「なほうとまれぬ」の表現史や句形を踏まえて議論がされている。

たとえば、鈴木宏子氏^{〔1〕}は『古今和歌集』に二首ある「なほうとまれぬ」の句形を持つ和歌の「ぬ」が完了であることによつて、その影響の中で藤壺宮はうとましく思われると詠んだと指摘し、工藤重矩氏^{〔2〕}も『源氏物語』時代の「なほ」に逆説の用法はないことから完了説を支持している。川島絹江氏^{〔3〕}も、物語の展開を重視し、不義の子をうとましく思われたいと詠んだとすると、光源氏に期待を与えすぎる点から完了で解釈する。

一方で、二首を「打消」で解釈する論もある。「なほうとまれぬ」を完了「ぬ」の終止形とした場合は、藤壺宮の和歌は四句切れとなり、第五句「やまとなでしこ」が切り離されることとなる。この点について、木船重昭氏^{〔4〕}は疑義を呈され、藤壺宮の和歌を三句で中止し体言止めの句形を持つ和歌とし、打消で解釈する。

また、柏木由夫氏^⑤は、平安後期以降に詠まれた「なほうとまれぬ」の句形を持つ和歌が、藤壺宮の和歌と近似していて、それらの「ぬ」がすべて打消であることから、藤壺宮の和歌も打消であるとする。

また、句形や表現から、完了か打消かが判断しきれない点によって、(4)の説、すなわち袖は〈光源氏の袖〉で、うとむは〈打消と完了の掛詞〉とする「両義的解釈」もなされている。たとえば、ツベタナ・クリステワ氏は、「紫式部がどうしても一つだけの意味に絞られたかったならば、読みのあいまいさを避ける方法もあつたはずだ」^⑥と指摘し、打消と完了の掛詞とする。同様に、上原作和氏も一首を「疎ましくも思う……、でもそんなことなど出来ない(わが子)」^⑦と両義的に解釈する。

二、藤壺宮の和歌の袖の所在について

研究史を確認してきたように、近年では、藤壺宮の「袖ぬるる」の袖は、光源氏の袖を指すと考えられている。その上で、「なほうとまれぬ」を、完了と打消のどちらかで、あるいは両義的に解釈するので議論がなされている。一方で、旧注・新注時代では主流であった説、すなわち、袖は〈藤壺宮の袖〉で、疎むは〈打消〉とする解釈もなされている。

たとえば、吉見健夫氏は「この「袖」は、特に源氏の歌に何も触れられていない以上、通常は詠者自身のものとしか考えられず、藤壺の袖ということになる」^⑧と指摘されている。

山崎和子氏も、初句に「袖ぬるる」と詠む和歌が、藤壺宮の和歌を除くと、平安和歌に以下の二首の用例があることを指摘し、

袖ぬるるこひぢとかつは知りながら下り立つ田子のみづから
ぞうき(『源氏物語』葵②三五頁)

袖濡るる荒磯浪と知りながらともにかづきをせしぞ恋しき
(『更級日記』三五頁)

この二首の「袖ぬるる」が「実際に露で袖が濡れることと涙に濡れることの比喩表現」となっていることを踏まえて、藤壺宮の和歌について「作歌主体である藤壺の袖が濡れるのである。その袖が濡れる所以は「露のゆかり」と思うことにある」^⑨と解釈する。

このような両氏の指摘があらながらも、藤壺宮の「袖ぬるる」の袖の所在については、現行注釈書では光源氏の袖とする説のみが採用され、袖の所在については議論されることが少ない。

藤壺宮の和歌における「袖ぬるる」が、光源氏の袖とされているのは、この和歌が光源氏の和歌に対する答歌である点を重視した結果であるように思われる。たとえば、『孟津抄』が、

哥の心は源の哥によそへつ、見るに心はなくさまて露けさま
さるとあるをうけて袖をぬらさるゝ露のゆかりは我によそへ
て若宮を御覧するとなればなを此若宮はうとましきとの心也
と指摘しているように、光源氏が「露けさまさるなでしこの花」
と詠み、撫子の花を差し出してきたので、光源氏の涙に濡れた「な
でしこ」を「なほうとまれぬ」と藤壺宮は詠んだのだと解釈され
ているものと思われる⁽¹⁰⁾。

確かに、『源氏物語』の贈答歌において、答歌は、贈歌の作り
出した和歌世界を踏まえつつ詠まれる傾向にある。次に掲げるの
は若紫巻における光源氏と僧都のやりとりである。

暁方になりければ、法華三昧おこなふ堂の懺法の声、山お
ろしにつきて聞こえくるいと尊く、滝の音に響きあひたり。

吹き迷ふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな

「さしぐみに袖ぬらしける山水にすめる心は騒ぎやはす
る

耳馴ればべりにけりや」と聞こえたまふ。(若紫①二一九頁)

法華経を読誦する声を明け方に聞いた光源氏は、感涙を誘われ
たことを歌に詠む。その歌に対して、僧都は「さしぐみに袖ぬら
しける山水」と詠む。僧都の和歌は、光源氏が「涙もよほす」と
詠んだことを受けて、光源氏が袖を濡らしている山水であるが、

行い澄ましている自身の心は騒ぐことがない、と詠んでいるもの
と解釈できる。和歌に指摘がされていなくとも、僧都の和歌の「袖」
とは、光源氏の袖を指すと見て間違いない。

この若紫巻における両者のやりとりは、第一詠作者が自身の嘆
きを歌に詠み、第二詠作者が「袖」と「濡る」を詠み込んで返歌
をしている点において、紅葉賀巻における光源氏と藤壺宮のやり
取りと共通している。若紫巻におけるやり取りの例を踏まえると、
藤壺宮の和歌の「袖ぬるる」の袖とは、光源氏が「露けさまさる」
と詠んでいることを受けて、光源氏の袖が濡れる、といっている
と解釈できよう。

しかしながら、紅葉賀巻における光源氏と藤壺宮の歌のやりと
りは、単純な贈答歌とはいえない問題があるように思われる。

三、光源氏と藤壺宮の和歌場面について

まず、確認しておきたいのは、光源氏の和歌は、藤壺宮のもと
に直接送られたものではなく、「命婦の君のもとに」送られたも
のであったという点である。

この和歌の場面以前から、光源氏は王命婦に「たまさかに逢ひ
たまひて、いみじき言どもを尽くし」(紅葉賀①三二六頁)と、
若宮への思いを何度も語っていた。

さらには、「いかさまに昔むすべる契りにてこの世にかかる中のへだてぞ」(紅葉賀①三二七頁)と、若宮と自身の間に生じる「へだて」を嘆く歌を王命婦に詠みかけて、王命婦も「見ても思ふ見ぬはたいかに嘆くらむこや世の人のまどふてふ闇」(紅葉賀①三二七頁)と、光源氏と藤壺宮が、子ゆえの闇に惑っていることを理解して同情を示す歌を返していた。

密通の秘密を知る王命婦は、光源氏の苦悩の理解者となり得たのである。このような一連の叙述のあとに、若宮と対面した光源氏は、「命婦の君のもとに書きたまふこと多かるべし。」と手紙を送る。そして、その手紙の中に書かれていたのが「よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさるなでしこの花」という歌なのである。

『新編日本古典文学全集』は、「命婦の君のもとに、宮あての御文をお送りになるが、さだめし綿々とたくさんお書きになるのであろう。」と訳し、王命婦を手紙の仲介者というふうに解釈している。

しかしながら、藤壺宮に手紙を見せる場面で、王命婦は「ただ塵ばかり、この花びらに」と光源氏の和歌を踏まえた発言をしており、彼女自身がすでに手紙を読んでいることを読み取ることができる。主人宛の手紙なのであれば、女房である王命婦が先に読

むというのではないであろう。

光源氏は、王命婦が藤壺宮に手紙を見せることを予測し、期待していたと考えられるが、通常の贈答歌の場面とは異なり、藤壺宮に対して、直接、歌を贈ってはいないという点には留意が必要である。

さらに、歌の表現も、通常の贈答歌とは異なっているように思われる。次に掲げるのは、紅葉賀巻において、朱雀院の行幸の試楽の翌日に、光源氏が藤壺宮に直接和歌を送った場面である。

つとめて中将の君、「いかに御覧じけむ。世に知らぬ乱り心地ながらこそ。

もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うちふりし心知りきや

あなかしこ」とある御返り、目もあやなりし御さま容貌に、見たまひ忍ばれずやありけむ、

「から人の袖ふることは立けれど立ちゐにつけてあはれとは見き

おほかたには」とあるを、限りなうめづらしう、かやうの方さへたどどしからず、他の朝廷まで思ほしやれる、御后言葉のかねても、とほほ笑まれて、持経のやうにひきひろげて見わたまへり。(紅葉賀①三二一頁～三二四頁)

この場面における光源氏の和歌は「心知りきや」とあるように、青海波を舞った自身の心の苦しみを知ってくれているかと藤壺宮へ問いかけており、藤壺宮もその問いかけに答えるように「あはれとは見き」と、あはれの気持ちを表出している。つまり、光源氏は、藤壺宮に對峙し呼びかけている。

對して、「よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさるなでしこの花」の歌には、光源氏の訴えや問いかけが表現されていない。光源氏の和歌は、「よそへつつ見れど露だに慰ますいかにかすべきなでしこの花」（『新古今和歌集』雜上・一四九四・恵子女王）に依つて詠まれたものであるが、吉見健夫氏が「恵子女王歌が間接的に相手に問い掛けるかたちであるのに対し、源氏歌では自己の思いに沈潜する独詠的なものとなっている」（註）と指摘しているように、藤壺宮に呼びかけるというよりも、若宮を見たことで惑乱し嘆いている自分の思いを表白しているような和歌である。光源氏の「よそへつつ」歌は、形式も表現される内容も、直接的に相手と對峙することを目指す贈答歌とは性質を異にしているのである。

四、藤壺宮の和歌と手習歌の近似性

同様に、藤壺宮の和歌も通常の贈答歌の場面とは異なる特質を

有しているように思われる。王命婦が藤壺宮に手紙を見たこと
で、光源氏の和歌は藤壺宮に読まれることとなり、「袖ぬるる」
の和歌を導き出すこととなる。和歌が詠まれた前後の本文を再掲
すると以下の通りである。

御覽せさせて、「ただ塵ばかり、この花びらに」と聞こゆるを、
わが御心にも、ものいとあはれに思し知らるるほどにて、

袖ぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとな
でしこ

とばかり、ほのかに書きさしたるやうなるを、喜びながら奉
れる……

王命婦のもとに届いた長い手紙を見た藤壺宮は、王命婦に促さ
れたことと「わが御心にも、ものいとあはれに思し知らるるほど」
だったこともあり、和歌を詠む。通常の贈答歌であれば、和歌だ
けではなく、何らかの言葉が書き添えられるものであるが、この
場面では、「ほのかに書きさしたるやう」な藤壺宮の和歌のみが
光源氏のもとに届けられる。

この和歌は、光源氏への答歌と考えられているが、和歌のみが
書かれた歌の形態は、贈答歌よりも、独詠歌の一種である手習歌
に近いものがあるように思われる。次に引用するのは、手習巻に
おいて浮舟が手習歌を詠んだ場面である。

「聞こえん方なきは、

岸とほく漕ぎはなるらむあま舟にのりおくれじといそが
るるかな」

例ならず取りて見たまふ。ものあはれなるをりに、今は、
と思ふもあはれなるものから、いかが思さるらん、いとほか
なきものの端に、

心こそうき世の岸をはなるれど行く方も知らぬあまのう
き木を

と、例の、手習にしたまへるを包みて奉る。「書き写してだ
にこそ」とのたまへど、「なかなか書きそこなひはべりなん」
とてやりつ。めづらしきにも、言ふ方なく悲しうなむおぼえ
ける。(手習⑥三四二頁)

出家を遂げた浮舟であったが、自身の行く末を思つて、うら悲
しい気持ちになつていた。そんな折に届いた、中將からの手紙を
しみじみとした思いで眺めたのちに、「心こそ」の手習歌を詠む。
この浮舟の手習歌は女房の手によつて中將に渡ることとなり、中
將の嘆きを引き起こすこととなるが、このような場面展開は、藤
壺宮の和歌「袖ぬる」と共通している。

藤壺宮の和歌も「あはれ」という自身の内的煩悶を契機として
詠まれ、和歌のみが書かれたその紙は、女房の手によつて男君に

渡り、男君に感慨を抱かせている。

『源氏物語』においては、手習歌を装う和歌があるが、藤壺宮
の和歌も手習歌を装つたような和歌といえるのではないだろう
か。次に引用するのは、空蟬巻において光源氏が手習のような和
歌を詠んだ場面である。

しばしうち休みたまへど、寝られたまはず。御硯いそぎ召し
て、さしはへたる御文にはあらで、畳紙に手習のやうに書き
すさびたまふ。

空蟬の身をかへてける木のものになほ人がらのなつかし
きかな

と書きたまへるを懐にひき入れて持たり。(空蟬①一二九頁
～一三〇頁)

空蟬から手ひどい拒絶を受けた光源氏は、彼女との関りを断と
うとする。しかしながら、空蟬に対して、執着心のようなものを
感じて眠ることができず、「空蟬の身をかへてける」の和歌を詠む。
この和歌は、小君が懐にひき入れて持ち去つたことで、空蟬が読
むことになるが、「さしはへたる御文にはあらで」とあるように、
空蟬をはつきりと目指して詠んだ歌ではない。

書きすさびの独詠歌が、小君の気遣いが介入することによつて、
意図せず相手に伝わつたように装つて、婉曲的に自己の思いを空

蟬に表出したものである。したがって、一首の内容も「なつかしきかな」と詠嘆的であり、空蟬に対して何かを呼びかけるような内容にはなっていない。

その後、小君から光源氏の和歌を受け取った空蟬も手習歌のような和歌を詠む。

つれなき人もさこそしづむれ、いとあさはかにもあらぬ御気色を、ありしながらのわが身ならばと、とり返すものならぬど、忍びがたければ、この御畳紙の片つ方に

空蟬の羽におく露の木がぐれてしのびしのびにぬるる袖

かな（空蟬①一三一頁）

この一首について、『新編日本古典文学全集』が「この歌は、空蟬が心に浮ぶままを手慰みのように書いたもので、源氏への返歌のつもりではないが、それとなく応じた形である」と頭注を付しているように、光源氏を激しく拒みながらも、内心では、彼のことを慕わしく思っ泣いて泣いていることを詠んだものである。そして、この一首も「ぬるる袖かな」とあるように、詠嘆的であり、独詠歌的な表現が取られている。

藤壺宮の和歌も、このような手習歌的な和歌と、同種のものといえるのではないだろうか。藤壺宮の和歌はあからさまな返歌ではなく、婉曲的な返歌と理解したい。

「わが御心」の思いを詠んだ独詠歌が「ほのかに書きさした」ような形態であったために、王命婦の気遣いによって光源氏の手に渡ったというふう装いに、光源氏へ婉曲的に自己表出した場面と考える。

若宮懐妊後、藤壺宮は、光源氏との関りを積極的に避けるようになる。「はかなき一行の御返りのたまさかなりしも絶えてにたり。」（若紫①二三四頁）という状態であった。若宮を出産後、警戒心を強めている中で、藤壺宮が光源氏を直接意識するような和歌を送るとは考え難い。

空蟬巻における光源氏の場合と同様に、手習歌のような和歌を相手に与えることが、藤壺宮にとってできる最大限の譲歩であったのではないだろうか。そのような藤壺宮の心のたゆたいが、「ほのかに書きさしたるやうなる」という筆跡に込められているよう。

光源氏と藤壺宮の和歌の場面は、通常の贈答歌場面とは異なる。

光源氏の和歌は、王命婦への手紙の中に書かれているものであった。手紙を王命婦が藤壺宮に見せることを見越して、同情を喚起するような我が身の姿を表現したものである。藤壺宮の和歌も現在の自分自身の胸のうちを、手習歌を装って、光源氏にさりげなく伝えたものと考ええる。

二人の和歌の場面とは、相手と向き合って対立を志向するよう

な場面ではなく、桐壺帝の前で若宮と対面することによって生じた惑乱を、それぞれに詠み合った場面といえる。当座の思いをそれぞれに詠みあっているという点では、贈答歌というよりもむしろ、唱和歌に近いような歌の場面であるといえよう⁽¹²⁾。

五、藤壺宮の和歌が喚起するもの

光源氏と藤壺宮のやり取りは、通常の贈答歌と同じように解釈されてきた。しかし、藤壺宮の和歌は、「わが御心」の思いを詠んだ、手習歌のような和歌である。一首には、当座の藤壺宮の心情が詠みこまれているものと考ええる。

したがって、藤壺宮の「袖ぬるる」の袖も、藤壺宮自身の袖が濡れることを詠んでいるものとして解釈をする。

手習歌のような形を取り、光源氏にさりげなく自身の思いを伝えた空蟬の和歌「空蟬の羽におく露の木がぐれてしのびしのびにぬるる袖かな」の「ぬるる袖」が空蟬自身の袖を指していると同様である。藤壺宮は、自身の袖を濡らす露のゆかりである撫子を「なほうとまれぬ」と詠んでいるのである。

藤壺宮の一首は、「なほうとまれぬ」について、完了か打消かで解釈が分かれている。そのような中で、袖を藤壺宮とする場合は、旧注時代から「なほうとまれぬ」は「打消」でのみ解釈がさ

れてきているが、「袖ぬるる」を、藤壺宮自身の袖が濡れると解釈した場合は、「打消」以外に意味が取れないように思われる。

「なほ」とは、「依然として・変わらず」という意味を持つ語である。したがって、藤壺宮は、袖が濡れる以前から、撫子の花に対して「うとまれぬ」思いを持っていたこととなる。

「ぬ」を完了とした場合、「私の袖が濡れるのでやはり撫子はうとましい」となり、藤壺宮は袖が濡れる以前から撫子の花を嫌悪していたことになる。しかし、撫子は「撫でし子」に通じる、慈しまれる花である。「うとましい」とした場合、和歌世界において愛おしいものと規定されている撫子を、藤壺宮がなぜ嫌っているかの説明が必要になろう。

木船重昭氏が「ぬ」を完了と見るときは、「うとまれ」ることと「(やまと)撫でし子」とは、不協和な反発作用でしかないであろう⁽¹³⁾と指摘されているように、違和感のある一首となる。一方、「うとまれぬ」の「ぬ」を打消としたのならば、「私の袖が濡れてもやはり撫子は愛おしい」となるが、この場合は、慈しまれる花というイメージを持つ撫子であるから、藤壺宮もそのような共通認識を有していて、いま撫子の花の露によって自分の袖が濡れることになったが、やはり撫子の花は疎ましくは思えないと詠んでいるものと解釈できる。類歌としては、たとえば、『伊勢集』

の次のような和歌があげられよう。

我が袖に移らば移れ手もやまず摘みや入れまし撫子の花
(三四八)

撫子の花に触れると、その色が袖についてしまう。そのような負の事態を起こす撫子であるが、手折ることは止められないという心情を詠んだ一首である。

『伊勢集』の和歌について、『伊勢集全注釈』が「撫子の色が袖に移ってしまおうとも、一心に摘み取って袖に入れてしまいたい」とすることで、その魅力を表現している^[1]と注記しているように、藤壺宮の一首も、撫子の花が魅力的であるがゆえに、露によって袖が濡れてしまっても、それによって撫子を遠ざける気持ちにはならないと詠んでいるものと思われる。

藤壺宮の和歌と同様に、初句を「袖ぬるる」としている『更級日記』の和歌

袖濡るる荒磯浪と知りながらともにかづきをせしぞ恋しき
(『更級日記』三五二頁)

は、宮中での生活は自分を涙に暮れさせる「荒磯浪」のようなものであると理解しているが、朋輩たちとの日々が魅力的であったので、自分の袖を濡らす「荒磯浪」の宮中が恋しい、と詠んでいるものであるが、『更級日記』と藤壺宮の和歌は、袖が濡れると

いう負の事態を生じさせる物事であると認知していながら、その物事が魅力的であるがゆえに負の感情を持つことができないという心情を詠んでいる点で共通している。

藤壺宮の和歌「袖ぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなでしこ」を訳すとすれば、以下のようなふうになる。

(露けき撫子の花は、手に取って鑑賞すると袖が濡れることになつてしまふ) 袖を濡らす露の来由と思つと、袖を濡らさないように当然遠ざけたくなるものでありましようが、やはり疎んじて遠ざけることはできない(撫でるといふ名を持つ) 大和撫子です。

一首に表現されるものは撫子に対する愛着である。加えて、撫子の花は、若宮の暗喩となつているのであるから、一首には若宮への深い愛情も表現されていよう。

藤壺宮は、若宮誕生後、「命長くも」(紅葉賀①三二五頁)と若宮のために長命を祈りつつも、若宮の姿を見ることで「いとあさましうめづらかなるまで写し取りたまへるさま、違ふべくもあらず。宮の、御心の鬼にいと苦しく」(紅葉賀①三二六頁)と、苦悶をすることになつていた。

姿を見ると嘆き、袖が濡れることになるが、かといつて、若宮は撫子のように愛らしいので、やはり疎んじて遠ざけることはで

きない。そのような、藤壺宮の母性愛的な思いが詠み込まれているのであろう。

葵巻において、藤壺宮は、讓位をした桐壺帝と仙洞御所に移り、「心やすげ」な日々を送りつつも、「ただ春宮をぞいと恋しう思ひきこえたまふ」（葵②一七頁）と、御所にいる若宮との距離を嘆いているが、それは、若宮が「うとまれぬやまとなでしこ」であるからに他ならない。

なお、「袖ぬるる露のゆかり」の「ゆかり」について、袖を藤壺宮の袖と解釈している、旧注や新注が「涙の所縁」と、嘆きの原因と理解しているのに対して、吉見健夫氏と山崎和子氏¹⁵⁾は、泣いている光源氏と若宮の血縁関係の意が暗に示されていると理解する。そして、山崎和子氏は一首を次のように訳している。

涙にくれる私の袖が濡れる、「露（あなた）の「ゆかり（子）」
と思うにつけても、やはり疎むことのできない、愛おしい「や
まとなでしこ（若宮）」です。

この点について意見を述べると、藤壺宮の和歌は、自身の袖に宿る涙の「ゆかり」と詠んでいるのであり、このゆかりは、涙と「縁のあるもの」・涙の「原因」といった程度の意味であると考えられる。

一首において、藤壺宮は「袖ぬるる」と嘆きの思いを詠んでい

る。桐壺帝との子であるのならば、若宮はまさに「瑕なき玉」であるのだから藤壺宮は嘆く必要がない。袖が濡れるのは、若宮が光源氏との不義の子であり、藤壺宮が「心の鬼」に苦しめられているからに他ならない。一首全体が、若宮が不義の子であるという事実を示しているのであるから、「ゆかり」の語から光源氏との血縁関係をことさらに読み取る必要はあるまい。

一首に込められているのは、若宮に対する藤壺宮自身の複雑な心情である。不義の子である若宮への藤壺宮の思いが、手習歌的な表現形式で表出されている。

稿者は、『源氏物語』の手習歌について、「地の文では明示されてこなかった詠作者の思いや無意識を表出し、心の奥行きを提示して見せる機能」と「他者に詠作者の想いを伝え、場面展開に寄与するという贈答歌的機能との、二重の機能を果たしている」¹⁶⁾ことを以前に指摘した。

手習歌的な和歌である「袖ぬるる」歌も、手習歌と同様の機能を有しているように思われる。すなわち、手習歌のような形を取ること、光源氏に藤壺宮自身の当座の思いをさりげなく伝えるとともに、これまで物語上に点描されるにとどまっていた、若宮に対する藤壺宮の思いを和歌に凝縮し、読者に提示しているのである。

おわりに

本稿では、藤壺宮の「袖ぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなでしこ」が喚起する情景について考察した。藤壺宮の一首は、光源氏に対する答歌という点が重視され、和歌の「袖」も光源氏の袖を指すと解釈される傾向にあった。

しかし、藤壺宮の和歌は、内的煩悶を契機として詠まれており、独詠歌の一首である手習歌と近似した形式で詠まれている。藤壺宮の一首とは、手習歌的な特質を有する答歌であり、その内容は藤壺宮の煩悶を凝縮したようなものと考ええる。

一首の「袖」とは、藤壺宮の袖を指しており、和歌の内容は『萬水一露』が「此とこ夏の花は袖をぬらす露のゆかりと思ふになをうとみかたきとの心也」と解釈しているように、撫子の花への愛情が詠まれているものと理解する。

藤壺宮の一首とは、和歌に詠まれる心情も形式も独詠歌に近いものであった。

ところで、花宴巻において、藤壺宮は光源氏の舞姿を美しいとは思いますが、その思いを光源氏に向けて発信することはない。中宮、御目のとまるにつけて、春宮の女御のあながちに憎みたまふらんもあやしう、わがかう思ふも心憂しとぞ、みづか

ら思しかへされける。

おほかたに花の姿を見ましかば露も心のおかれまじやは御心の中なりけむこと、いかで漏りにけん。(花宴①三五五頁)
紅葉賀巻の青海波の場面では、「あはれとは見き」と光源氏に返歌していたのとは対照的に、花宴巻では藤壺宮の思いは胸の内秘められていく。

藤壺宮の「袖ぬるる」歌は、青海波の場面における光源氏との贈答歌と、花宴巻の独詠歌とのちょうど中間に位置している。藤壺宮の「袖ぬるる」を手習歌的な一首と理解すると、贈答歌・手習歌的な和歌・独詠歌という表現形式の変化から、藤壺宮が光源氏へと、ゆるやかに心を閉ざしていく様相を読み取ることもできるのではないだろうか。

注

- (1) 鈴木安子氏「藤壺の流儀―「袖ぬるる露のゆかりと思ふにも」―」(『王朝和歌の想像力 古今集と源氏物語』笠間書院、二〇一二年・初出二〇〇四年)。
- (2) 工藤重矩氏「紅葉賀巻「袖ぬるる」の和歌解釈―文法と和歌構文―」(『源氏物語の婚姻と和歌解釈』風間書房、二〇〇九年・初出二〇〇七年)。
- (3) 川島絹江氏「藤壺の和歌―『源氏物語』における『伊勢物語』受容の方法」(『源氏物語の源泉と継承』笠間書院、二〇〇九年)。

- 初出一九九二年)。
- (4) 木船重昭氏「藤壺宮若宮誕生以後」(『源氏物語の研究(続)』大
学堂書店、一九七三年)。
- (5) 柏木由夫氏「紅葉賀」の藤壺の和歌「袖ぬるる…」の解釈につ
いて(『王朝女流文学の新展望』竹林社、二〇〇三年)。
- (6) ツバタナ・クリステフ氏「助詞助動詞のマジックミラー」(『心
づくしの日本語』筑摩書房、二〇一一年)。
- (7) 上原作和氏「藤壺物語」(『人物で読む源氏物語 藤壺の宮』勉誠
出版、二〇〇五年)。
- (8) 吉見健夫氏「紅葉賀巻の藤壺―贈答歌の解釈から―」(『中古文
学論攷』一七、一九九六年二月)。
- (9) 山崎和子氏「(露)の縁の(なでしこ)の花」(『源氏物語におけ
る「藤壺物語」の表現と解釈」(風間書房、二〇一二年・初出
二〇〇七年)。
- (10) 近年でも、注3の論文において川島絹江氏は「藤壺歌の「袖濡
るる露」は光源氏の歌の「露けさまさる」を受けて、光源氏の
袖が涙で濡れていることを言うのであろう。」と指摘され、注1
の論文において鈴木宏子氏も「藤壺宮は、源氏がさしだした涙
の露に濡れたなでしこの花のイメージを受け取って、「あなたの
袖を濡らした、その涙の露に濡れていると思うにつけても、や
はり心底愛することはできない、このやまとなでしこ」と詠じ
たと理解されよう。」と指摘されている。
- (11) 注8前掲論文。
- (12) 『源氏物語』の贈答歌の中に、唱和歌的な性質を有するものがあ
ることを、稿者は以前に「『源氏物語』唱和歌考―橘の小鳥にお
ける浮舟詠の解釈を中心に―」(『百舌鳥国文』二九号、
二〇一八年三月)と「唱和歌」の契機―『源氏物語』の連帯の
- 場に関する考察―」(『百舌鳥国文』三〇号、二〇二二年三月)
で論じた。
- (13) 注4前掲論文。
- (14) 秋山慶氏・小町谷照彦氏・倉田実氏『伊勢集全注釈』(KADOKAWA、
二〇一六年一月)。
- (15) 注8前掲論文・注9前掲論文。
- (16) 拙稿「浮舟の手習歌―その異質性と機能について―」(『百舌鳥
国文』二八号、二〇一七年三月)。
- ※引用した本文は、散文類は『新編日本古典文学全集』(小学館)
に、和歌は日本文学WEB図書館版「新編国歌大観」に、『萬水
一露』と『孟津抄』は『源氏物語古注集成』(おうふう)に、『源
氏物語評釈』は『源氏物語古注大成』(日本図書センター)に、『源
氏物語玉の小櫛』は『本居宣長全集』(筑摩書房)に拠った。
- (こ)にし みく・本学客員研究員)